卒業する今

新しい一歩を踏み出す人、仲間を送り出す人――。
各部の方に、今の思いをききました。

幼稚園 Kindergarten

卒園するいま、思うこと

伊藤 舞 幼稚園年長組保護者

卒園まであと1年になった昨年の今頃、突然の休園と今までに経験したことのない世の中の様子に不安な気持ちでいっぱいになりました。幼稚園生活最後の1年をどんなふうに過ごすのか、お友達とたくさん遊んでキャンプに行って、ますます成長していく子どもたちを当たり前のように考えていたのに、当たり前の世の中はなくなり今何をするべきか向き合わなければいけない日々でした。

しかし子どもたちは逞しく、遊びにも行けずお友達にも会えない毎日でも前向きに生活し、初等部や中等部の姉兄たちはオンライン授業にも友達とのテレビ電話にも慣れ、気が付けばあっという間の1年でした。当たり前の生活のありがたさや、お友達と会えることの幸せをより感じる1年だったように思います。

休園中もお手紙やメールで子どもたちに語り掛けてくださった先生方、いつもお祈りしてくださった皆様に心から感謝し、卒園する子どもたちの背中を力強く押せる親でありたいと思います。卒園おめでとう。

いつも神さまと共に

橋本治奈 幼稚園教諭
藤田晨平 幼稚園教諭

入園した時には神さまのことを知らなかった子どもも、幼稚園で神さまのお話を聴く時や祈る時を大切に過ごす中で、それぞれが神さまと出会っていきます。幼稚園だけではなく、ご家庭でも教会生活や日々の祈りの時を大切に過ごしてくださっていることで、神さまへの信頼や感謝の心が培われていきます。年長組の子どもたちと集まりをしていると、「今日は私がお祈りしたい」と言う声が次々と上がります。「今日休んでいる○○ちゃんが元気になりますように」「今日も楽しく遊べることが本当に嬉しいです」「イエスさまを信じる人がたくさん増えますように」など、誰かのことを想って小さな手を合わせて、心を込めて祈る姿があります。

幼稚園で何度も聴いたみ言葉の1つに「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。(テサロニケの信徒への手紙Ⅰ 5章16～18節)」とありましたね。これからも、どんな時でも神さまは傍にいて守っていてくださいますから、安心して、そして感謝して歩んでいかれますようにお祈りしています。

クリスマスページェント

年長アトリエ

初等部 Elementary School

小さなことから

林田 敬 初等部6年

ぼくは6年間、初等部でいろいろなことを学んできました。その中の1つに、周りの人のために行動するということがあります。しかし、コロナウイルスのような、自分の力ではどうにもならないこともありました。そんな時に、どうすれば良いか分からなくなることがありました。

コロナ禍でぼくが読んだ聖句の中に、次のようなものがありました。それは、からし種とパン種のたとえです。どんなに小さくても成長すれば何倍にも大きくなるというたとえです。ぼくはこの聖句を読んで、どんなに小さいことでも、ぼくにできることをやろうと思いました。コロナ禍であれば、手洗いやうがい、マスク着用といった小さいことですが、それを全員がやることで事態は大きく変わると思います。

小学生の時は小さなことしかできないけれど、中学生や高校生になったら世界のためにもっと大きなことをしたいです。そのために、中等部へ行っても小さなことからがんばりたいです。

ご卒業おめでとうございます

窪田 靖 初等部教諭

新型コロナウィルス感染者増加による緊急事態宣言に伴い、臨時休校下での新年度スタート。まず頭に浮かんだのは6年生の皆さんのことでした。洋上小学校、1年生パートナーとの出会いなどが気になりました。

その後も様々なことができなくなり、制約があって、大変な1年間でした。そんな中でも休み時間やプロジェクト活動、クラブ活動、ページェントの練習で見る皆さんは以前と変わらない様子で、私が元気をもらいました。

新型コロナウィルスに感染してしまった方、医療従事者の方々のように命がけで働いていらっしゃる方、仕事が減ったり無くなったりされた方、長年の計画が止まってしまった方などの前できれい事など言えません。でも、こういう時だからこそ分かった、できたということが必ずあると思います。マイナスをプラスに変えようとする意思が大切だと思います。神様はいつもあなたと一緒におられます。

クリスマス讃美礼拝

中等部 Junior High School

日々を大切に

石井 大翔 中等部3年

中等部での長いようで短かった三年という月日が経とうとしています。

この中等部での生活は、日々の授業、部活動などとても充実していました。その中でも、毎日行われる礼拝で聖書に触れ、様々な教えを学ぶことが出来ました。また、1年生時にクリスマス礼拝の博士役、2･3年生の時には聖歌隊に選んでいただき、讃美歌に対する楽しさや言葉では表せない心の充実を得ることが出来ました。

僕が好きな聖書箇所は、マタイによる福音書7章24～27節の「家と土台」についての箇所です。岩を土台にした家は、雨が降り、川があふれ、風が吹いて襲っても倒れなかった。マタイは、基本や基礎の重要性を教えてくれました。僕はこの聖句から、日々の学習や部活動の練習など一日一日が僕自身の基礎になると置き換え、充実した生活を送ることができたと思います。

中学3年時は、新型コロナという感染症で野球部の大会の中止、体育祭や文化祭の縮小など、今までとは違う年になってしまいましたが、無事卒業することが出来たのも、両親や先生方、その他たくさんの方々のお陰だと思い、感謝しています。次の高校というステップでも基本や基礎の重要性を忘れることなく、僕の高校での目標である、野球部で一日も早くレギュラーになれるよう頑張っていきたいと思います。

今、伝えたいこと

河内 由気 中等部教諭

「人には、あらゆる経験をプラスに捉え、その後の人生の糧とする力が備わっている」。これは、72期の皆と共に過ごしてきた3年間の経験から、今、私が強く思っていることです。

72期が中等部に入学してきた日のことを鮮明に覚えています。「皆小さくてコロコロしていて、ただただかわいい存在」という印象を抱きました。

私は3年間という時間の中で大きく、そして逞しく成長していく皆さんの姿に大変驚かされると同時に、これまでの人生において経験したことのない感動を覚えています。ただ、心残りなことがあります。それは、72期の皆が最上級生としてこの中等部を牽引する年に新型コロナウイルスが猛威を振るったという事実です。

青学講堂で初めて皆と出会ったあの日、「この子達が3年生になった時、どのような活躍を見せてくれるのだろうか」と夢を膨らませて、担任団全員でワクワクしていました。しかし、沖縄への卒業旅行は中止、運動会と中等部祭は縮小。また、休み時間に伸び伸び体を動かすこともできない。ストレスが溜まる日々だったと思います。「コロナさえなければ」という思いは心をよぎります。

ですが、皆に知ってほしいことがあります。それは、72期一人ひとりに人に夢を抱かせる力があるということ。そういう魅力を秘めているということです。ですから私は、皆さんが卒業して中等部生活を振り返る時、「コロナの影響を受けて何もできなかった」という思いを抱くのではなく、「あの経験があったからこそここまで成長することができた」と語れる人になっていると強く信じています。

「あらゆる経験を人生の糧に変える力」。皆さん一人ひとりに備わっているこの力を今こそ発揮し、72期としての誇りを胸に、この中等部を巣立ってくれることを心から願っています。

中等部祭

中等部運動会

高等部 Senior High School

神さまのご計画を信じて

野呂 道子 高等部3年

私の高等部生活を振り返ると、常に神さまのご計画が働いていたように感じます。特に最後の1年は思いがけないウイルスの流行など苦しい出来事も多くありましたが、その分当たり前に学校に通えること、友人に会えることの幸せと感謝に気づかされました。

また昨夏、尊敬していた教会のおじいさまを突然天国にお送りすることとなり、素晴らしい方だっただけに神さまなぜですか、と神さまのご計画が分からず悩んだ時もありました。しかし悩む中で、私にできることはそのご計画の意味が分かる日まで神様を信じ祈り続けることだけだ、と思い受洗を決意しました。

クリスチャンの母と一緒に幼いころから毎週教会に通っており、教会に連なることが当たり前すぎて逆に受洗を決心できずにいた私が、大切な方の死をきっかけに受洗したこともきっと神さまのご計画だったのだろうと感じています。

卒業後も「何事にも時がある」という聖書のみ言葉にあるように、神さまのご計画を信じて祈りつつ歩んでいけたらと思います。

すべてが益となる

樋口 玲子 高等部3学年主任

高等部生活で一番印象に残っていることは何ですか?

2ヵ月間のオンライン授業。登校再開で友に会えた喜び。前を向き無言で食べた昼食…どれも忘れられない経験ですが、3年間の中ではほんの一時の出来事です。本当はその前2年間にも多くの経験があり、この1年はそれらを土台にした集大成の年でした。この異例な1年の印象は大きいですが、それにばかり目を向けるのではなく、この3年間のすべてを通して得たことを大切にしてほしいと思います。

「万事が益となるように共に働く」(ローマ8:28)と聖書は語ります。私たちに起こる出来事は神様のご計画の中にあり、たとえその時私たちの目には無意味に見えても、いつかはすべてが繋がり益となる、という意味です。

この3年間の経験も、今後経験するどんな幸せも試練も、すべてが益となり何一つ無駄に終わることはありません。そう信じて、どんな時も前向きに歩んで行ってください。皆さんの前途に神様のお守りをお祈りしています。

コロナ禍での生徒会行事

クリスマス礼拝の収録風景

女子短期大学 Women's Junior College

あたたかいまなざしに育まれて

神戸 詩音 女子短期大学子ども学科3年

大きな変化の中で過ごした最後の学生生活。今まで通りにできなくなったこと、多くの我慢や制限の中、何ができるのか、どうすればできるのかを考えてきました。それはこれからも続くかもしれません。ですが、「できたこと」もたくさんありました。日々の授業、実習、卒論作成など、学生生活の一つ一つを無事に終えられ、ほっとしています。また、私は料理のレパートリーが少し増え、家族ともたくさん笑い合えました。祈り支えられ、「おかげさまで」と思えたことも皆きっとあったはずです。

卒業を迎える今、率直に思います。この短大に入学してよかったと。子ども学科は、先生方、副手の方々、学科全体が私たち学生を大切に思い、包み込んでくれます。その中でたくさんの本物に触れ、感じ、考えることができました。私は4月から保育者になる道を選びました。これから出会う子ども一人ひとりを大切に見つめ、日々関わっていきたいと思っています。この学び舎が私たちにそうであったように。

こころを高くあげよう

横堀 昌子 女子短期大学子ども学科教授

諸々の集大成にあたる今年度、遠隔での教育活動に伴った困難。お一人おひとりがどんなに努力して日々取り組まれたことでしょう。「できる形」を探し精一杯取り組んだ姿、育ち、実りが本学の歴史に刻まれました。「涙と共に種を蒔く人は喜びの歌と共に刈り入れる」(詩編126編5節)。誰もがチャレンジャー。尊い歩みです。

「落ちてきたら/今度は/もっと高く/もっともっと高く/何度でも打ち上げよう/美しい願いごとのように」(黒田三郎「紙風船」、詩集「もっと高く」思潮社、1964年)。たちどまるときも、未来と希望をふくらませていましょう。危機は永遠に続くとは限らず、願いは「抱く」ものなのですから。私たちがともに探究したのは、自分を活かし他者と生きる豊かさ。物事の本質を問い、自分の頭で考える姿勢。何もないところからでも何かを創り出そうとする気概と創造性。あなたのこころに青短が宿り、旅は続きます。さあ行ってらっしゃい! 自分の可能性を信じて。

クリスマス礼拝(グロリアス・クワイア)

オンラインシンポジウム

大学 University

ともに歩む

矢島 若葉 大学経済学部経済学科4年

大学における最後の年は新型コロナウイルスと共にありました。部活は対面でやりたかった。もっと友達と遊びたかった。これら全てはウイルス一つで打ち砕かれてしまった未来でした。

私は何かにつけて「コロナさえなければ」とか「コロナが収束すれば」といった言葉をならべていました。しかしこの状況のなかで諦めず、今できる全てをもって活動している人達がそばにいました。その姿を見て、頼もしいと感じるのと同時に「何かしなければいけない」という焦りが生まれました。

そんな焦りと不安の中でイザヤ書14章26節の「これは、全地に向けて定められた計画である。また、これは、すべての国々に伸ばされた手である」という御言葉に触れ、焦る必要はないと思うことができました。そして私も神の計画の一部として、できる全てをもって神とともに歩みたいと思うようになりました。私にとってこの一年間は「神とともに歩む」という想いを与えられた大切な年です。

-Dominus illuminatio mea-

詩編27:1「主は私の光」

小張 敬之 大学経済学部教授

私は青山学院大学に勤めて38年、3月31日に定年を迎えます。日々の礼拝において、聖書のメッセージを聞けた環境に感謝しています。

世界は今、新型コロナウイルス感染症の歴史的災禍に見舞われ、政治、経済、文化等の様々な場面で困難な状況を引き起こしています。今まで信じてきた社会システムが崩壊し、新しいパラダイムの中で人々は暗中模索しながら生活しているのではないでしょうか。

誰でも世界に対するイメージや宇宙や空間に対する考え、何かを信じて生きています。どのような神観、世界観を持つかはその人の考え、生き方に大きな影響を与えます。自分の人生の羅針盤を再構築する良い機会です。他人との比較により相対的に自分の価値観を決めることが多い世にあって、本校の教育理念は「私の目にはあなたは高価で尊い。私はあなたを愛している。(イザヤ書43章4節)」です。

神は各自に最高の人生を約束しています。これからの社会生活において、困難に直面することもあるかもしれませんが、John Wesleyが死ぬ間際に残した "Best of all, God is with us." を忘れないで下さい。「主は私の光」である事を心にとめ、皆さんの人生が大いに祝福されますようお祈りいたします。

ご卒業おめでとうございます。

オンラインによるクリスマス礼拝 (左:ハンドベル・クワイア、右:聖歌隊)

CHRISTIAN ACTIVITIES CENTER NEWS 宗教センターだより

高等部より

卒業礼拝 3/8(月) 13:45
イースター礼拝 4/9(金) 8:15

女子短期大学より

卒業礼拝 3/15(月) 13:30 ガウチャー記念礼拝堂
始業礼拝 4/5(月) 10:30 短大礼拝堂

大学より

卒業礼拝 3/27(土) 9:00、11:00、13:00 ガウチャー記念礼拝堂
新入生歓迎礼拝 4/5(月)－9(金)

本部より

被災地を覚える礼拝 3/11(木) オンライン礼拝
全学院教職員新学年度礼拝 4/2(金) 17:00 ガウチャー記念礼拝堂

※各部の予定は変更となる場合があります。

幼稚園より

卒園礼拝
3/ 4木

終業礼拝
3/11木

卒園式
3/12金

始業礼拝
4/ 9金

入園式
4/12月

イースター礼拝
4/16金

初等部より

卒業礼拝
3/ 4木 9:00 礼拝堂

6年生を送る礼拝
3/ 9火 8:30

イースター礼拝
4/13火 8:30

中等部より

卒業礼拝
3/16火 8:30

イースター礼拝
4/27火 9:20

表紙写真
2018年度 女子短期大学卒業式

説教

“Do what you love. Love what you do.”—— 過ぎ去ろうとしない神の愛

島田 由紀 大学宗教主任

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。（ヨハネによる福音書 3章16節）

2021年春、青山学院から卒業される園児、児童、生徒、学生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。4月から皆さんが進まれる新たな人生の場において、青山学院での学びと経験とが皆さんの確かな礎となり、お一人おひとりが力強く歩みだされますよう、心よりお祈り申し上げます。

2020年度は誰にも予想のできなかったものでした。2020年春から私たちの行動は大きく制限され、オンラインでの学修という、少し前には想像すらしなかった生活様式を余儀なくされました。学ぶ者たち、教える教員、支えるご家族・職員、すべての人にとって心身への負担が大きな生活で、心がうつむきがちになった日々もありました。しかし、その中でも、荒れ地に一輪の花が咲くように、折々に気づきや学びが与えられてきました。振り返ってみれば、皆さんお一人おひとりに、不自由な状況にあっても、オンライン授業だったからこそ、気づいたこと、考えたこと、取り組めたことがあったのではないでしょうか。

オンラインを通して、この一年、学生の皆さんが葛藤しながらさまざまにこの困難な時と向き合う姿に接しました。一人の学生のことを少しご紹介します。この学生は、青山学院の高等部から大学に進学したそうで、これまでに教わった聖書の言葉をよく心に留めており、青山学院の校風を大切に思い、私が担当したキリスト教科目のオンライン講義にも熱心に出席してくれました。あるアートの活動に—（私が推察するに）これからの人生を賭けるかもしれないほどの熱意で—取り組んでいるようでした。

毎週丁寧に記された考察には、時折、このアート活動に触れる部分があり、良いものを制作したいという純粋な思いが伝わってきました。実習科目すらオンラインとなった落胆を記しつつ、気持ちはいつも制作活動に向かって、自分が今できることを考えていました。過去に独りよがりで人を傷つけてしまったことを振り返り、他者への配慮のない者によって制作されるものはそれ自体も他者への配慮を欠くと考察する文章は、とても興味深いものでした。青山学院のこのアートのサークル活動は、ゼロになりそうだったところを、皆で協力し、今ではプロと連携して他大学にはない独自の実績を作っているとのこと。

この学生の考察を読むと、「Do what you love. Love what you do.」という言葉が自然と心にのぼってきました。「あなたの愛することを為しなさい、あなたの為すことを愛しなさい」。地道な作業の困難も創りあげる喜びをも知るこの学生にとって、制作活動は、呼吸のように生そのものであって、それへの思いは愛にほかならないと感じられました。

「自分はクリスチャンではないけれど」と慎ましく前置きして綴られる、高等部以来学んできた聖書の言葉や今年度のオンライン礼拝説教についての考察の言葉も、制作を為す心や手、身体と結びつけられて語り出されていました。この学生は制作を通して、神の愛、主イエスの愛を確かに仰ぎ見ているようでした。多くの失敗やコロナ禍の制約にもかかわらず、良いものを創りたいという、やみがたい溢れる思いを知るからこそ、どのような嵐や挫折のときにも人間を過ぎ去ろうとしない神の愛を、直観的に知っていると感じさせられました。

青山学院から卒業されていく皆さん、全世界的に先の見えない状況の中で、学び舎をあとにし新たな環境に入っていく不安は大きなものかもしれません。ことに、自分が選択肢をコントロールできない場面がかつてなく多いこの情勢です。しかし、このようなときだからこそ、お一人おひとりが、ご自分の生活のなかに《愛》の余地を持っていてほしいと願います。あなたが（たとえ一瞬でも）損得を忘れて思いと手間とを注げることは何ですか。あなたが困難や失敗に直面しても、思いはそれに戻っていくことは、何でしょうか。

青山学院は、神の愛が皆さんの人生の礎とされるよう願ってきました。神こそは「Do what you love. Love what you do.」を究極においてなされるお方です。神は愛において皆さんお一人おひとりの生を形造られ、喜びをもってお一人おひとりの生へと関わられます。神によって造られた皆さんへの神の愛は、どのような困難があろうとも、やみがたいもの。神の愛は皆さんから過ぎ去ろうとしないのです。

皆さんが神の愛という確かな礎を知り、恐れることなく歩んでいかれますことを、切にお祈りいたします。

WESLEY HALL NEWS

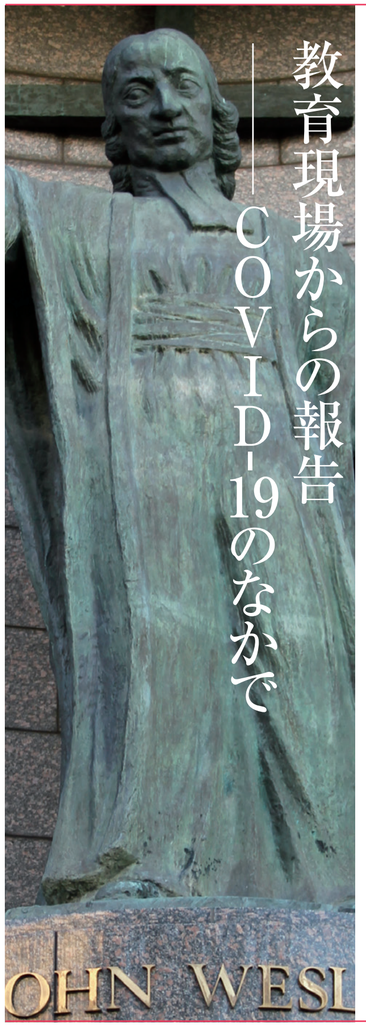
No.135 MARCH 1, 2021

2018年度 女子短期大学卒業式

わたしは世の終わりまで、
いつもあなたがたと共にいる。

マタイによる福音書 28章 20節

地の塩、世の光
The Salt of the Earth, The Light of the World
（マタイによる福音書　第5章 13～16節より）



幼稚園から

石橋 エリ 幼稚園主事

幼稚園は5月の緊急事態宣言解除後に保育を再開しましたが、これまで通りに園内の一つの所に集まり礼拝をすることは困難な状況でした。保育の中心である礼拝を子ども達と共にささげることができない日が来るとは思ってもみないことでした。子ども達が通う教会学校もお休みとなったままのところがほとんどでした。

しかしやがて子どもたちは幼稚園で集まりをする際には隣の人と距離を取って座るなど、互いを守るために必要な行動を自ら取るようになります。幼稚園での礼拝は、手話賛美などの新しい形を考えながら、再び守ることができるようになりました。そしてこの間も保育者は、毎朝の保育前の礼拝とそれぞれの教会での主の日の礼拝をささげることを大切にし続けました。

この困難な状況の中で幸いであったことは、主イエスキリストの父なる神さまに「神さまどうしたら良いのですか?」「助けてください!」と礼拝や祈りを通して、問いかけることや助けを求めることが私達に許されていたことでした。

神さまへの問いかけの答えは私達の思うような形では返って来ません。それでもなお、私達の創り主である唯一の神さまにのみ光を見て、今後も子ども達との園生活を工夫しつつ進めていきたいと願います。

コロナ禍の一年を振り返って

浅原 一泰 中等部宗教主任

普段通りに卒業生を送り出せず、桜の花びらが舞い散る4月に入学式を行えない中で、命を脅かすウイルスと向き合って生きなければならない2020年度が始まりました。学校に登校できなかった6月初めまで、中等部でもオンラインによる配信授業が始められ、生徒たちは早寝早起きの生活を守る難しさを経験し、それは教員にとってもリモートでのホームルームや授業、動画作成のために熟慮を重ねる労苦の期間であったに違いありません。宿泊行事や部活の合宿や試合が中止になり、上級生たちは目標をどこに定めるべきかに、また新入生たちは友達作りなどに苦心したと思います。この異常な事態において神は生徒たちをどう導こうとされるのか。聖書に答えを捜し求めても見つからない中で、ある時ふと、生徒たちを通して神は答えを示して下さいました。運動会や中等部祭を行うことができた二学期、彼らの表情は光り輝いていました。「学校に来れなくなったことで、当たり前に過ごして来た友達との毎日、部活の練習、授業が当たり前でないこととその有難さに気づかされた」とある生徒は証ししてくれました。「光は暗闇の中で輝いている。」コロナの暗闇が覆う世界の中であっても、昨日から今日へ、今日から明日へと前進しようとするこの生徒たちこそ、神は今も、いつまでも愛の光で輝かせて下さると信じる者です。

共に前へ

吉岡 康子 女子短期大学宗教主任

「共に生きる」ことをあらゆる場面で大切にしてきた女子短期大学にとって、分断ではなく、繋がり続けることにさまざまな形で挑戦し、新しい出会い、学び、発見が与えられたことが思いを超えた恵みでした。「ステイホームのみなさんへ」と題したショートメッセージを多くの方々のご協力により配信しました。

また短大被災地支援ボランティアチーム Blue Birdと大学の公認愛好会MF3.11 東北応援愛好会が中心となり、宮古市と共催して「熊本にエール！ 宮古ー青山ー熊本　オンラインジャズコンサート」を9月7日に開催し、翌8日にはオンラインシンポジウム「共に前へ—コロナ禍時代の傷と絆」を実施しました。

第一部「コロナ禍における災害のケア」には、宮古市長・山本正徳氏、前熊本県知事・潮谷義子氏、青山学院大学卒業生で現在三井記念病院医師をされている白杉由香理氏をシンポジストにお迎えし、宮古、熊本の被災から復興への取り組みや課題、医療現場の最前線の状況などをとおして、コロナウィルス感染拡大のなかで私たちが何を知り、どの様に行動をすべきかにつき多くを教えていただきました。

第二部は「地域活性化の現状と課題」をテーマに、青山学院卒業生で短大ボランティアのサポーターである加藤洋一郎氏や熊本ルーテル学院大学のボランティアグループの学生も参加し、コロナ感染拡大の状況下にあっての支援活動のあり方などにつきディスカッションをし、多くのよき学びの機会となりましたことを感謝いたします。

万事が益となるように働かれる神さま

小澤 淳一 初等部宗教主任

新型コロナウイルスの感染が拡大する中、キリスト教学校の根幹である礼拝も今までと同じように礼拝堂に集まって讃美をし、祈り、御言葉を聴くということができなくなりました。礼拝は、オンライン礼拝になり、モニター越しに礼拝をささげることになりました。礼拝をささげるということはどういうことか、改めて問われているようにも思いました。

ある時、インターネットに掲載されていた漫画で神さまとサタンの対話というものがありました。地球を目の前にして神さまに向かってサタンが「コロナウイルスを使ってあなたの教会を閉鎖した」と自慢げに言います。すると、神さまは「それどころか、私はコロナ禍によって、すべての家庭に教会（祈りの場）を開いてきたところだ」と答えたというもの。

私たちは新型コロナによってできなくなったことにしか目を向けていないことに気づかされます。そうではなくて、神さまは、すべてを用いてよいもので満たしてくださる、私たちに悪いようにはなさらないのです。ちょうど、「嵐を静める」テキストで、「なぜ怖がるのか、まだ信じないのか」と言われた主イエスの言葉を思い起こします。

何が神さまに喜ばれることかを祈り考え、この状況だからこそできることにチャレンジしていきたいものです。

当たり前ではない日々

山元 克之 高等部宗教主任

当たり前の毎日は、当たり前ではないことを誰もが感じた1年となりました。高等部では5月までのオンライン授業期間中は、聖句と200文字程度にまとめた先生方のメッセージを毎日配信しました。6月になり分散登校が再開され、礼拝も短い時間ではありましたが放送室より各HR教室に流されました。その後、例年通りの時間で礼拝をまもることができるようになり、感染対策を講じたうえで讃美歌も1節ではありましたが歌えるようになりました。夏休みがあけてから、一学年ずつPS講堂に入り、他の学年はその音をHR教室に放送する形で礼拝をまもりました。

COVID-19下で考えたことは、いつの時代もそうであったのですが、どの教職員も礼拝を中心と考え、その為に多くの協力をしていただき、礼拝の時間を持つことができているということを、改めて強く感じました。

礼拝の時間を大切に考え、協力してくださる教職員の方々がいるからこそ、キリスト教教育が今の時代も変わらず行うことができています。高等部生もまた、その空気の中で聖書の御言葉に触れることができています。当たり前の毎日は当たり前ではない。礼拝を捧げられることもまた、神の御業であると感じています。

重要な決断は…

塩谷 直也 大学宗教部長

ネット上で素敵な商品に出会い、そのままクリックして購入に進もうとした際、「やっぱり商品を手にしてから考えよう」と思い直し、取扱店にまで行ってお目当ての商品に触れて確認します。すると「あれ、思っていたのと違う…」と気づかされ、一気に熱が冷めたということがありました。

大学は長期化するオンライン授業に可能性を見出しつつあります。しかし同時に「あれ、思っていたのと違う…」という状況も増えました。そこから言えることは、「重要事項であればあるほどオンライン上だけでは決定しない」ということです。私たちはオンラインで限りない情報を取得できます。しかしそれだけで全てがわかったつもりになり、重要な決断までクリック一つで済ませるのは危険です。手間暇かけてでも出向き、見て聞いて触れて、判断すべき事柄があります。

その最たるものが人を信頼するという決断です。だから学生の皆さん、「あなたに書くことはたくさんありますが、インクとペンで書こうとは思いません。すぐにでもあって親しく話し合いたいものです。」（第3ヨハネ 13～14節） そして一日も早く、「知識の伝達」ではなく「信頼関係」を築ければと願っています。

編集後記

今号の「Wesley Hall News」には、コロナ禍にあっても力強く歩む園児や児童、生徒、学生たち、そして保護者や教職員の姿が記されています。それぞれの文章を読むことにより、聖書の御言葉が一人ひとりに生きる勇気と希望を与えていることを知ることができました。青山学院を巣立って行く卒業生たちが、どのような時もイエス・キリストの教えに拠って立ち、「地の塩、世の光」として豊かな活躍をされることを祈り願います。

（大学宗教主任　高砂 民宣）

Wesley Hall News 第135号　2021年3月1日発行
発行 青山学院宗教センター 学院宗教部長 大島 力
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL.03-3409-6537（ダイヤルイン）
（URL）http://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html
（E-mail）agcac@aoyamagakuin.jp
編集 ウェスレー・ホール・ニュース編集委員会
印刷 株式会社 万全社